

## <STORY>

①東静岡駅を降りたらほとんどの人が南口改札へと流れていく。多分私と同じように最近完成した県立図書館が目的だろう。駅舎を出たらいきなり目の前には※芝生の広場が広がっており、OLやサラリーマンなどがくつろぎながら※雑誌を読み、幼稚園の児童たちも祖母さんとシートを敷いてお弁当を食べていた。でもその先には図書館の入り口のドアがこちらを向いて開いており、彼ら彼女たちは館内から屋外へ出てきたのか？どこにも入り口があるのか？周囲を見渡すと入り口が※放射線状に幾つもあり、多方面から来訪者を歓迎しているようだ。しかも360度ほぼガラス張りの建物を見上げてみたら、それは巨大な※ピラミッドケーキのようだった……。

※「芝生の広場」：年齢性差関係なく誰もが自由に使えるコミュニケーションゾーン。但し広場は館内から開かれたドアの先にあり、利用者動態は入場時に把握されている。

※「雑誌を読み」：雑誌や書籍は持ち込みも可能だが、基本的には蔵書の屋外閲覧を可能としている。

※「放射線状に幾つもあり」：120°おきに3か所設置されており、①駅改札前 ②駅西駐車場方面 ③グランシップ方面から入りやすくなっている。

※「ピラミッドケーキ」：1960年代に呼ばれていた切り分ける前のbaumkuchenのこと。

②駅側に開かれたドアから入場するが一旦立ち止まり、※LED滅菌消毒を受けなければならない。これで館内ではマスクは不要だ。消毒時に手首に付いたパッチをかざしながら天竜杉の縦格子を進む。いわゆる「フィトンチッド」というやつかな？とても気分が和らぐ。その格子の間には様々なセンサーが組み込まれており、私が今日何を調べに来たのか？※履歴から推測して館内フロアをいざなうようになっていた。

開かれたドアから視界が開けると一瞬、”えっ？！”と声が出る空間になっていた。図書館中央部には小川が流れる河川敷のような空間があり、子供たちが保護者とキャーキャー言って砂まみれで遊んでいた。とはいえ目を遣れば実は濡れても良い蔵書を見ながらお山やお城を作り、その小川で本を洗ってスタンドに返却していた。本当に図書館なのだろうか？

見渡せばアボカドを半分に切ったような構造になっており、中心部はこのような※遊環構造、そして外周部に本来の図書館としての役目を果たすゾーンが各階に配置されていた。

誘導されるままに2階へ。電子書籍を応用した※VRフロアだそう。歴史上の人物を複数VRで登場させて自分も当事者となって「彼ら」と討論して史実を理解するもよし、専門書を人に見立てて意見交換したりできる。

リアリティを伴った理解ができる新しいシクミだな。

※LED滅菌消毒：食品工場のクリーンルームの応用版

※履歴から推測して：パッチは記憶装置を兼ねており、別の目的で来館しても上書きされずにデータはフォルダ分けされる。

※遊環構造：建築家・仙田満さんが提唱する、「人が集まる建築のつくりかた」のこと。

※VRフロア：書籍を”立体化”させることで体験しながらジブンゴトのように習得する方法。

③3階に案内されると本家本元蔵書閲覧コーナー。この図書館の建築中の長い時間を使って蔵書の総てが※ドライクリーニングされており、コンディションは抜群！やはり電子化やVR化が普通となった今でも多くの蔵書をめくっては振り返りを繰り返す従来の図書館の利用方法は必要だと感じる。圧倒的な蔵書数はこの図書館の凄さを感じざるを得ない。

※ドライクリーニング：実際に可能なサービス。誰が触ったのかわからない本を清潔化させ、蔵書価値を高める側面も持つ。

④最上階は※イメージエリアのようだ。ガラス張りの個室は富士山側では向上心や生産性を高める討論を、一方伊豆半島も遠望できる海側では広義に捉われない新しい発想を生み出すミーティングに使われているらしい。

その一端に※「思考空間」という個室群を発見、一室に入ってみた。中は靴を脱いで県産材ヒノキの床に地産材の間仕切り壁と観葉植物に覆われた3畳ほどの空間。ほお……これなら集中してアイデアが生まれそうだ！

※イメージエリア：単なるワイドビュー会議室ではなく2階のVRフロアを大規模ミーティング向きに応用させたもので最大50人と同時VR可能。

※思考空間：漫画喫茶とは明らかに一線を画す、発想瞑想専用の個室空間で便益施設は照明と空調のみという静寂と癒しの環境で物思いにふける。

⑤お腹もすいたし再び1階へ。6畳ほどの空間では往年の「※小鹿商店会」の皆さんが日替わりで軽食を提供してくれている。

往時のハナシや年長者のアドバイスを聞くにつけ、※「まさに生き字引」を感じるな。けして文字から得られるものだけが「知識」ではないことを思い知らされる。食後は隣のカフェスペースへ移動。やっと起業できたというオーナーが※サテライト出店しているらしい。さり気なく置いてあるコーヒー関連本も蔵書だって。そして閉館1時間前の「黄昏タイム」では県内の※クラフトビールがたしなめるといふ。醸造元は旧図書館に足繁く通い、ひたすら蔵書をもとに勉強したという。

これらの費用は全てパッチで精算可能、電子自動納税や個人認証事項が館内で得られるのは今や当たり前の設備だ。

世代を厭わず得られる「知」がこの図書館にはあるね。おっと閉館5分前！この場所なら毎回通っても魅力的な発見があるね。

いやあ、充実した1日だった！！今度は友達を誘って再訪しようと思う。

※小鹿商店会：現存する団体

※まさに生き字引：高齢者の雇用の機会と多世代交流の基本型。人生の経験者としての「知」を得られる機会は今後も必要とされる。

※サテライト出店：起業の敷居を下げるスタートアップ方式。出店期間は最大6か月で利用者のパッチデータから満足度や今後の営業指針の助言などが得られる。軽食とカフェの売上の一部は屋外公園の芝生の維持管理費に充てられる。

※クラフトビール：現在県内に約18のブルワリーが存在している。